

初折裏第十三 子らの声舞ふや吹雪の花は八重

康一 春 【植物】

初折裏第十四 うららかにあれ国の内外

かおる 春

今の時代に生き、将来を担う希望そのものである子どもたちの上に舞いちる花吹雪。何と
うららかな情景でしょうか。子どもはもちろん、世界中が柔らかな日ざしにあふれ、晴れ
やかに落ち着きますようにとの願いを込めての挙句ですね。願いましよ。かなわない願
いはないと言います。国の内外何処もうららかなでありますように。

今回を持ちまして半世吉満尾いたしました。長いお付き合いありがとうございました。
発句にありますように行橋は連歌の町です。秋の連歌大会、学生のための連歌講座は二十
年近く続いていましたところ、今回の COVID19 禍に見舞われました。けれど、それに替わる
ボックス連歌が多くの方々のご支援で無事終了しましたことを心から感謝申し上げます。

(次点句)

霞はれゆく美しふる里

翠 春 【簞物】

本日の新聞で見つけました記事によりますとウイルスが地球上に出現したのは30億年
前、人類はたかだか20万年前。人間はウイルスが存在していた世界に現れた新参者だそう
です。私たちの体内腸内細菌のバランスを整えたり、胎児を守ったり、健康維持を助けるウ
イルスもあり、人間はウイルスと直接、間接的にかかわることで存続してきたとのことです。
遊ぶ子どもたちの上に花の吹雪が舞い散る。植物や動物、人間もウイルスも時折はその関
係性が乱れることはあっても調和のとれた美しいふる里を、やがて見ることが出来ます。そ
のように努力しますとの意ですね。

霞の奥に匂ふ豊かさ

由希子 春 【簞物】

「匂ふ豊かさ」とは何と素晴らしい表現でありますことか。「霞」すなわち COVID19 を乗
り越えた後の生活は今までのありようとは違った豊かな社会が展開されそうな気がする。
子どもたちの将来を祝福するかのようには舞う花吹雪がそれを匂わせます。との付けですね。
コロナウイルスは現代社会がいかに脆いかを示しました。私たちは今後、ウイルスとの共
生の上で、社会全体への対応として持続可能な社会への取組みSDGsが提唱されています。
「誰も置き去りにしない」社会を目指す、これ以上の「豊かさ」がありませんか。

集ひあたたか寿ぎの宮

善帆 春 【神祇】

花は咲き盛り子どもらの上に花びらが降り注ぎます。人々は何も憂うことなく宴を催
し、神様は暖かく見守ってくださいています。誠にめでたく挙句にふさわしい句です。

(講評)

時はめぐりて優し春風

英司 春

気候のみではなく何かと厳しい冬の季節でした。けれど時は廻り春ともなれば満開の桜を優しい風が花を揺らし、子どもたちの上に花吹雪となつて舞い落ちます。この世も捨てたものではありません。希望をもって進みましょう。との挙句ですね。

畑打つ音の絶え間なき村

千嘉子 春

村中のどこかから、そして絶えることなく畑仕事をする音が聞こえる。ということは平和のしるしでしょう。戦争もなく子どもたちは伸び伸びと育つて、幸せそうに花吹雪をすら浴び、声を上げて遊んでいる。これが人々の日常なのでしょう。何たる豊穰。

この地球のあちこちでは子どもが子どもではいられない状況にあります。飢餓、難民、児童労働など目を覆うばかりの子どもたちの現実を報道などで知らされます。本来子どもは豊かに庇護されるべきです。ところが今日、この国も子どもたちの貧困が問題となつてきています。

ともあれ畑を打つ傍らに子どもがいる長閑な田園風景。もしかして都市空間での貸農園などでもこんな風景が見られるようになるかもしれませんね。

心ふるはせやがてたびだち

静江 雑

花の吹雪で送られた卒業式。やがてそれぞれ進学あるいは社会に巣立つことでしょう。新しい世界への希望と不安に心が震えます。との意と解釈しました。気持はよく解かりますが「たびだち」そのものは卒業とはならず、したがって季節を採ることが出来ません。この句は挙句（最後の句）ですので春で終わることになっていきます。あしからず。

九十九折なる新緑の径

敏江 夏 【植物】

桜並木の続く九十九折の径は何処でしょう。七曲りは全山桜並木で安部山公園も昔からの名所で、我が家の近くにも小規模ながら八景山もあります。

早咲きの山桜、ソメイヨシノ、枝垂桜、八重桜も全て咲き終えて葉桜からやがて新緑となります。その木の下道もまた格別ですね。巣ごもり生活が続きますとマスクなしで爽やかな風に吹かれての散歩に憧れます。

「新緑は」夏の季語になります。春の句が欲しかったところです。ごめんなさい。

この星ひとつに平和の祭典

妙子 雑

この星、つまり地球全体に花の吹雪が舞い降りてCOVID19 収束とならんことを。そして世界中全ての国の人々が幸せになり、太陽系唯一生命体の存する美しい星。この星、地球丸ごと平和の祭典が行われますように。しかしとの切なる願いですね。私ももちろんそれに共鳴します。賛同します。けれど、惜しいかな春の季語がありませんでした。

めぐれる春は尽きぬ行末

大輔 春

春は年ごとに巡ってきます。前句との付けは子どもたちには長い将来があり、その行く末を図るにはあまりにも長い。長いからこそ希望は捨てることはありません。春は何度も廻ってきますとなりましょうか。

この一年間は子どもたちにとっても大変な年でした。学校は休校し、様々な式や行事が中止、短縮され、大学生はリモート学習と。そしてこの困難に出会って進路変更を余儀なくされた人もいます。しかし新しい春はまたきますとの、若い人たちへのエールですね。

世紀をつづる春の行灯

親純 春 【時分 光物】

日が長くなったとはいえお彼岸までは夜が長いですね。そのまだまだ長い夜に。行燈を灯して何を書き綴っていますか。前句にどう付くのでしょうか。

親純さんが幼かった頃、花吹雪にうずもれた幸せだったころから、やがて迎える一世紀（？）近くを綴るといふことでしょうか。つまり自伝執筆中ですね。頑張ってください。

霧はれゆきて弾む歌垣

敦子 秋 【簞物】

濃い霧の中で相手の顔も定かではないところ、やがて霧が晴れて歌垣が賑わいを増したと読めます。しかし、前句との付けはどうなりましようか。春から秋へ季移りの必然性がなく、春爛漫の花吹雪を歌垣としたのでしょうか。それにしても子どもたちもいます。

歌垣を辞書（岩波古語辞典）に見てみましょう。うたかき【歌垣・歌場】《歌懸きの意。異性に歌を歌いかけて求婚すること。懸きは古くは四段活用の動詞。「歌垣」は奈良時代の当て字》とのことですので今回の半世吉連歌の挙句にはそぐいませんね。

なお、霧と霽と霞は微妙に異なるらしいのですが詩歌の世界では霧は秋。霞は春です。

黄蝶とび交ふ豊の国原

君子 春 【動物 名所】

不要不急の外出、ことに夜の八時以降の外出は避けるようにとの緊急事態宣言が正月明け早々に発出されました。巣ごもり状態で人との会話がままならない独り暮らしは、老人に限りません。リモートワークでパソコンに向かいずくめの若年、壮年層も多くいます。

そんな状態から解放たれ、野に飛び出して蝶のように自由に飛び回りたいものです。「子らの声して」花吹雪舞い散る場所はこの地「豊の国」とは我田引水。わが町が一番も領けなくはないですが・・・このボックス連歌は地域限定ではありませんでした。

ともあれ福岡県にも発出された緊急事態宣下の私たちですね。どうか速やかにこの事態から解放されますことを。